セキュリティー輸送強化

平野ロジスティクス関西支店

AEO承認の強み生かす

温調車による高付加価値も

平野ロジスティクス（本社・神戸市、田中英治社長）の関西支店は、空港間のOLTとともに、温調車を活用した医薬品・精密機械の輸送など、高付加価値サービスに力を入れている。またAEO制度の「特定保税運送者」承認のもと特定委託輸出申告制度を利用したサービスなど、高度なセキュリティー・サービスの提供も進めている。さらにフォワーダー向けに提供している関空を拠点とした集荷・配達サービス、ダメージチェックなどの柔軟、きめ細かなサービスも強みとしている。

高瀬英二常務

田中基康支店長

平野ロジスティクス関西支店は、今年6月からりんくう物流センター（泉佐野市りんくう往来北）に移転した。以前の立地よりも関空に近くなり、施設規模も拡大。より高度なセキュリティー体制を構築している。倉庫も確保しており、例えば輸入貨物の通関後の一時保管などとして活用している。

関西支店で運用している車両は、専属便として活用されている車両を含めて大型車50台、小型・中型車8台。ユニット・ロード・デバイス（ULD）対応の大型温調車2台も配備している。GPS、ドライブレコーダーの装備、トラック輸送時のセキュリティーバンドの活用など、セキュリティー品質も特に重視していることが特色だ。またエンバイロテイナーのコンテナを温調車に搭載し、保冷効果を維持・補完する輸送サービスも提供するなど、柔軟に顧客ニーズに応じている。

96インチ仕様のULDを4台搭載できるセミ・トレーラー車「+1」（プラス・ワン）も近く関西支店にも導入される予定だ。これにより同社の「+1」保有台数は8台となる。

関西支店は、空港間のOLT輸送については航空会社やGSAなど約40社からの輸送を受託。昨今のOLT需要としては、関空への輸入到着貨物を成田空港に転送し、成田空港から海外へ輸送するといった三国間輸送の需要も多いという。成田空港関連のOLTとともに、今年3月末の羽田国際線発着枠の増枠を受けて、羽田空港関連のOLT需要も増加傾向。福岡空港と関空間の需要も底堅いという。

平野ロジスティクスの「+1」OLT輸送とともに、温調車を活用した医薬品や精密機械輸送などの付加価値サービスも提供している。

平野ロジスティクスは昨年6月に西日本、神戸税関で初めてAEO制度の「特定保税運送者」の承認を受けた。認定通関業者との連携のもと、特定委託輸出申告制度を利用したサービスなど高度なセキュリティー・サービスの提供を進めている。さらに貴重品を対象としたセキュリティー輸送も提供している。これはセキュリティー会社のガードマンが乗車したエスコート車が帯同し、集配時を含めてセキュリティーに万全を期しているもの。

高瀬英二・常務取締役輸送本部長は「セキュリティー管理とコンプライアンス体制がしっかりと構築された輸送事業者として、高度なセキュリティー・サービス、高付加価値サービスを提供している。特定委託輸出申告制度の活用をはじめ、お客さまにコスト、リードタイム面でもメリットを提供できる」と話す。

一方、関西支店は、フォワーダー向けのサービスの一環として、関空を拠点にした集荷・配達サービスなどを提供している。各地で集荷しての空港搬入、あるいは輸入貨物の各地への配達について、ニーズに応じて混載便やチャーター便などの選択を可能としている。

関空から同一地方向けあるいは同一地方から関空向けの貨物を混載しての集配、チャーター便での集配、緊急輸送に際しての車両手配などまで、平野ロジスティクスが情報の窓口となってアレンジ・手配を行うことで、より迅速、効率的な業務を提供していることが特色だ。貨物のダメージチェック、イレギュラーレポート作成、ニーズに合わせた輸送方法の提案やハンドリング業務も提供している。

関西支店の田中基康支店長は「しっかりとお客さまのニーズを把握しながら、常に新しいことにチャレンジして最先端のサービスを提供し、お客さまの期待に応えていきたい」と話す。

平野ロジスティクスはドライバーの、中継輸送のトライアルを年内も開始する予定だ。ヘッドと荷台部分を分離できるトレーラーの特色を生かして、例えば首都圏―関西圏の輸送については静岡近郊に中継地点を設定。中継地点でヘッドを交換することで、中継地点まで輸送してきたドライバーは別のトラクターをけん引して発地に折り返すことができる。これにより、複数日の宿泊を伴う長距離輸送を避けられるなど、就労環境の改善が図られる。

ドライバー不足の傾向が強まる中で、就労環境の改善は業界でも大きな課題となっている。平野ロジスティクスは、トライアルの実施などを通じて課題を整理するなどして、就労環境の向上につなげる方針だ。